笹沢左保
新大岡政談

新潮文庫

新大岡政談

新潮文庫　草329＝2

昭和五十九年九月十五日　印刷
昭和五十九年九月二十五日　発行

著者　笹沢左保
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部(〇三)二六六―五一一一
編集部(〇三)二六六―五四四〇
振替東京四―八〇八番
定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

㊟　印刷・凸版印刷株式会社　製本・株式会社大進堂
© Saho Sasazawa 1984　Printed in Japan

ISBN4-10-132902-8 C0193

新潮文庫

新太閤政談

世沢左保著

新潮社版

目次

嗤った御落胤……七
消えた生き証人……六〇
病める人質……一〇七
怪談行人坂……一四九
巾着切の爪……一九六
鬼と仏の吟味……二四四
石地蔵御用……二八四
お裁き剣法……三三一
お白洲の貴公子……三七一
二人の天一坊……四一七
解説　藤田昌司

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

新大岡政談

嗤った御落胤

1

火がついたように泣き続ける赤ン坊、水の流れが滞っているドブの饐えた臭気、井戸端でこぼれた米や麦を拾い集める子どもたち、仏頂面でボロを引きずりながら怒鳴り散らしてばかりいる女房たち、破れ障子を繕っている職のない男――。

そうしたことが特徴の極貧の長屋よりは、いささか救いのある松の木長屋であった。松の木長屋と呼ばれてはいるが、何も長屋の真中に松の大木が枝を広げているというわけではない。

待つ気がないと、大家は勤まらない。つまり、家賃を催促しても無意味であり、店子のほうから払いに来るのを待つほかはない。待つ気十分でいるからと、大家が店子たちに申し渡した。

その「待つ気」をもじって、「松の木」長屋だと誰からともなく言い出した。以来、この四ツ谷御簞笥町の棟割り長屋を、松の木長屋と呼ぶようになったと伝えられている。大家も店子たちも、洒落っ気のある連中だったということになる。

洒落っ気があるのは、それだけ気持に余裕があるという証拠だった。店賃は幾つか溜まっていても、その日の暮しに不自由はないというわけである。それぞれ行商とか職人とか、定まった稼業を持っていて、一家のあるじという顔をしている。

一般に夫婦の平均年齢が若いので、子どももあまり多くはなかった。まだ子ができないという若夫婦から、精々三人の子持ちで四十代初めの夫婦までといったところである。それだけに女房たちも、小綺麗にしているし、長屋全体が何となく若やいだ雰囲気なのであった。

井戸端に集まったら最後、女房たちは容易に腰を上げようとしなかった。まるで小娘みたいに喋りまくり、声を合わせて陽気に笑うのである。江戸の空にも届きそうな賑やかさであり、沈んでいるのは忘れられたままになっている洗いかけの食器や濯ぎ物だけであった。

そんなときの話題は、まず猥談と決っている。女ばかりが集まっての猥談だから、姦しいことこの上もない。そのうちに引き合いに出された新妻が、全員の視線を浴びて頬を染め、ついには逃げ出して家の中へ駆け込むという図が見られるのだった。

日暮れ前に、殆どの亭主が帰って来る。一斉に晩飯をすませて、寝る前のひとときをまた世間の噂話で過すのであった。どこかの戸口の前に縁台が置かれると、何となくそこへ顔馴染みの連中が集まって来る。

同じ長屋の住人だから、身内と変らなかった。誰かが冷えた麦茶を運んで来れば、ほかの者が茹で栗をザルに盛って差し入れるという工合である。大家も顔を見せたりすれば、和気藹々の夕涼みになるのだった。

夕涼みと言っても陰暦の八月末だから、もう暑くはなかった。昼間のうち、たまに残暑を思わせるような陽気になる、という程度であった。蚊はもう出ないし、宵のひとときの閑つぶしが最も楽しい時期だった。

「ところで、お前さんたち……」

縁台の真中に腰を据えている大家の仁兵衛が、集まっている連中をぐるりと見渡した。大家の左右に四人、背中合せに六人と、縁台はもう満員であった。ほかに五、六人が、縁台を取り巻いていた。

一様に栗を齧っていた男と女が、仁兵衛へ視線を走らせた。大家の仁兵衛が、妙に改まった言い方をしたからである。冗談半分に口にしていたこれまでの話とは、少しばかり違うらしいと誰もが思ったのだ。

「紫頭巾の御落胤の噂は、もちろん耳にしているだろうな」

仁兵衛はそう言って、麦茶を口に含んだ。誰も返事をする者はなく、黙々と栗を齧っている。興味がないのではなく、下手に口はきけないと何となく用心しているのだった。それだけ、「御落胤」という言葉には重みがあるのであった。

「ここは、長屋内だ。何も遠慮することはないし、構わないから好きなように喋りなさいよ」

と、仁兵衛だけが、澄ました顔でいる。そこで初めて二人、三人と口を開き、たちまち饒舌が交わされることになるのだった。口火を切ったらもう、留まるところを知らない連中なのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

「紫頭巾をかぶって、同じ紫の絹の羽織は三ツ紋付き、白絹の袴に白足袋をはき、腰には脇差し、年の頃なら三十三、四、色白く鼻筋通り、人品賤しからぬ面体にて、いざわれこそは……」

「やめなよ、馬鹿らしい。だが、紫頭巾の御落胤ってのは、確かにそんな野郎なんだよな」

「おい、気をつけろ。御落胤のことを、そんな野郎なんて呼び方をしやがって……」

「だって、大家さんが構わねえから好きなように喋っちまえって、言っているんじゃあねえかい」

「でもさ、御落胤だって言ってもさ、物もらいと、変りないんだろ」

「物もらいと、一緒にしちまいやがら。おい、おめえ少しは嬶に、口のきき方を仕込んでおきなよ」

「物もらいじゃあねえ。ありゃあな、金を出せって命じているのさ」

「近々、身共は御父上さまとの対面の儀を許されるはずじゃ。晴れて父子対面のときを迎えたら、十分な礼を尽し、今後何かにつけて便宜を取り計らって遣わそう。それ故にいま、金子十両を用立ててはくれぬか」

「気味の悪い声を、出すんじゃあねえ」

「そう言われて、いやだよと首を横に振れるかい」

「振れねえな」

「そうだろう」

「下手に、断わってみろい。晴れて父子対面の儀がすんでから、どんな仕打ちをされるかわからねえもの」
「家財没収ですむならまだいいが、何もしねえのに罪に問われてあの世行きってことになるかもしんねえぞ」
「紫頭巾の御落胤が、この松の木長屋にお立ち寄りになったら、えれえことになるじゃあねえかい」
「馬鹿野郎、長生きするぜ」
「金十両也を差し上げられるような、変った野郎がこの長屋にいるのかい」
「ドブ掃除しても、そんな野郎は見つからねえだろう」
「紫頭巾の御落胤がお立ち寄りになる先は、大店（おおだな）の商家、分限者（ぶげんしゃ）の屋敷、大金持ちの先代の隠居所と決っているんだよ」
「つまり、十両や二十両なら大掃除のあとのゴミみてえに、いつでも御用立てができるところしか、紫頭巾の御落胤はお立ち寄りにならねえのさ」
「だがよ、そいつは本物の御落胤なのかねえ」
「やっと、そのことに気づきやがったな」
「じゃあ、やっぱり偽者かい」
「そうは、言ってねえよ」
「だって、おめえ……」

「本物とも、偽者とも、判断がつかねえんだよ」
「何しろ、御落胤たる証拠の品ってのを、見せるんだからなあ」
「それで偽者みてえな気もするが、万が一、本物だったら大変なことになるってんで、望まれた者の全員が十両、二十両と御用立てするってわけだ」
「御用立てって言っても、返してくれるんじゃあねえんだろう」
「いやだねえ、そういうみみっちいことを気にするやつは……。おめえみてえのは、長屋をおん出て金貸しになりゃあいいんだ」
「なれるものなら、なってみてえよ。金貸しが客にもしてくんねえこのおれが、金貸しになれるはずもねえだろう」
「あれあれ、つまらねえことで威張ってやがる」
「用立てってのは貸せじゃあなくて、くれってことなんだよ」
「だったら、まる儲けじゃあねえかい」
「その証拠の品ってのは、どんなもんなんだい」
「まずは、羽織の紋どころを見よ、とこう来るんだ」
「何の紋だい」
「裏梅鉢よ」
「梅鉢なら、加賀百万石前田さまの紋どころだろう」
「ただの梅鉢じゃあなくて、裏梅鉢なんだ。そして差し出すのが、金蒔絵の印籠だ。安物じ

ゃあねえ、どう見たって大名の持ちものよ。その印籠もまた、金の裏梅鉢の紋どころ入りって寸法だ」
「ほかには……？」
「それでも信用されねえとなると、印籠の中から古い書き付けを引っ張り出す」
「何の書き付けだい」
「御落胤のおふくろさんに遣わされた御墨付きってやつで、つまりわが子に相違ないと認めてあるのよ」
「その紫頭巾は、いってえどなたさまの御落胤なんだい」
「あれまあ、起きているうちから寝呆けていやがる。おめえは、肝心なそのことまで、まだ耳にしちゃあいねえのかい」
「すまねえ」
「何も、謝ることはねえやな。裏梅鉢は、下野宇都宮九万石戸田さまの御紋どころだ」
「下野宇都宮は九万石戸田さまとなると、御老中の戸田山城守さまってことじゃあねえのかい」
「大したもんだ。そこまでわかっていりゃあ、上出来だぜ」
「すると、御老中の戸田山城守さまの、御落胤ってわけなのかい」
「そうよ。いまをときめく御老中さまの御落胤と聞いちゃあ、疑わしかろうとなかろうと十両や二十両を、惜しんじゃあいられねえってことさ」

「御老中の御落胤ねえ」
長屋の連中のやりとりは、掛け合いよろしく際限もなく続けられるのであった。ザルにはもう、一粒の栗も残っていなかった。喋りながらよく食べるというのが、長屋の男女の特技でもあったのだ。
「さて、その紫頭巾の御落胤だがな。今朝方には、表の井筒屋さんにお立ち寄りになって、金二十両なりの御用立てを仰せつけられたそうだ」
話に結びをつけるように、大家の仁兵衛が言った。
「いよいよ、四ツ谷にまで、おいでなすったかね」
「井筒屋の旦那、どんな面をして二十両を差し出したことか」
「これでもう、紫頭巾の御落胤に金を用立てた者は何人になるだろう」
「二十人は、下らねえぜ」
「用立てさせた金が、ざっと三百両ってところかな」
「三百両ありゃあ、栗が何俵ぐらい買えるかねえ」
「この野郎、張り倒すぞ」
「夢の中で三百両を朝、目が覚めるまでに数えきれるかい」
勝手なことを言っているのも、長屋の住人にとっては所詮、違う世界の出来事だという気持があるからだった。少なくとも、いま太平楽を並べている連中の中には、不幸な人間や悪党はいないはずであった。

だが、同じ松の木長屋の住人でも、すでに床の中にはいっている者もいた。半年ほど前から、この長屋に住みつくようになった夫婦者であった。亭主を次郎吉、女房をお久という。亭主の次郎吉は薬売りだそうで、毎日必ず大きな薬箱を背負って出かけて行く。付き合いの悪い男で、長屋の住人たちとは挨拶を交わすのが精々であった。一旦家にはいったら、外へはもう出て来なかった。

女房のお久も同様で、買物に出かけるほかはひっそりと家の中で鳴りをひそめている。井戸端での女ばかりの談笑にも、決して仲間入りしなかった。大年増(おおどしま)のくせに、愛想の一つもないのである。

長屋の連中もいつの間にか、次郎吉夫婦を相手にしなくなっていた。孤立したがる変り者は珍しくもないし、古くから松の木長屋に住んでいる者にとっては、どうでもいい存在だったのである。

次郎吉とお久は並んで床の上に腹這(はらば)いになって、差しつ差されつの盃(さかずき)のやりとりをしていた。戸締りも、早くからすませてあった。土間のほかに、四畳半と六畳の部屋がある。二組の夜具は、奥の六畳間にのべてあった。

外で縁台を囲んでいる男女の声が、笑いとともに聞えて来る。だが、次郎吉もお久も、知らん顔で酒を飲んでいる。こうなると、どっちが無視されているのかわからない。夫婦は極めて日常的なやりとりしかしなかったし、まったく静かな酒であった。

やがて、外の声がぴたりと途絶えた。長屋の住人たちは解散して、それぞれ家の中へ引っ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton